



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第11主日 B年 (2021年6月13日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：エゼキエル書 17章 22—24節

第二朗読：コリントの信徒への手紙二 5章 6—10節

福音朗読：マルコによる福音 4章 26—34節

## テーマ：成長させてくださる神

### 三つの朗読から

第一朗読にある「移し植える」は、人間に対する神さまの介入、関わりを表す表現となります。神さまは、ご自分から、手をかけて、移し植えてくださるのです。「うっそうとしたレバノン杉」とは、枝を広げ、天高く伸びていく杉のイメージです。神さまが手ずから移し植えてくださったからこそ、杉は大きく成長するのです。そして「知るようになる」という言い回しから、神がイスラエルの民を通じて歴史の中に働かれる、介入することを知るようになるのです。

第二朗読で示されている見えないものに目を注いでいく生き方は、この世の生き方とは少し違います。そのことが朗読の中に指摘されています。1. 「主から離れている」とは、現実を正しく認識し、受け入れることの大切さを教えます。2. 「主に喜ばれる者」とは生き方の基準に、あるいは基礎に主イエス・キリストの思いに従うことがあることが示唆されています。3. そして、「裁きの座の前に立ち」で、終末の時にキリストの前に立たされるのだという意識が必要であることを気づかせます。

福音朗読では「人が土に種を蒔いて」とあります。種を蒔く人は、ただひたすら種を蒔き続けます。成長させてくださるのは神ご自身なのです。

からし種は、それこそ目に見えないほど小さな種です。イスラエルでは2月頃から花を咲かせます。あちこちからし菜の花が咲きます。日本でいったら野に咲く菜の花のイメージでしょうか。

『マルコによる福音書』第4章にはイエスさまが語ったさまざまなたとえが集められています。種蒔く人のたとえ (1—9節)、たとえを話す理由 (10—12節)、種蒔く人のたとえの説明 (13

ー 25 節) と続いて、今日の福音朗読の箇所二つのたとえ話となります。11 節で「あなたがたには神の国の秘密が打ち明けられているが、外の人々には、すべてがたとえで示される」とありますので、たとえば秘密である神の国を伝えるための方法としてあるのでしょう。

また、第一朗読に登場するレバノン杉は古代からの銘木だそうです。しかし、現在は乱伐によってほんのわずかな地域で生息するだけだそうです。植えた後の管理が難しいらしく、一年間でほんの数センチにしか成長しないそうです(写真は植えてから8ヶ月目のレバノン杉)。レバノン杉もからし種も、どちらも成長するというイメージがありますが、同時に手をほどこす、手をかけてあげなければその成長は望めない、そんな植物だと思います。



## 説教

からし種は、繁殖力が強く、生い茂って灌木のようになります。パレスチナに住むユダヤ人たちにとって、どんどん根を張り、他の耕作地をも乗っ取ってしまうからし種の生命力の強さは目を見張るものがあつたでしょうし、それこそ厄介の種でもあつたでしょう。創造の秩序を守るためにほかの種と混ぜて植えてはならないという律法があります(レビ 19 章 19 節、申 22 章 9 - 11 節参照)。これに基づいて、からし種が大きく育っても他の植物と混ざらないように植えなさいという律法の註解書であるミシュナーの教えもありました。そう考えると、わたしたちが一般的にこのたとえ話に抱く成長するイメージとは異なる、生命力はあるものの少し厄介者のイメージを当時の人々は抱いていたのかもしれませんが。だとしたら、鳥が巣を作るほどに成長するなんてあり得ないというのが彼らの理解だったでしょう。

イエスさまからたとえ話を直接聞いた人びとはガリラヤの貧しい農民たちです。畑のはじっこに群生しているからし菜。どんな地にあつても、たくましく根を張り、畑の境界線を破って広がっていくその姿は、たくましさを表すものでもあつたでしょう。しかも、灌木のようになり、藪を作りあげ、小鳥たちがそこに隠れるように生息する様は、いのちの不思議な交歓を人々に教えたかもしれません。また、バビロン杉の巨木は威風堂々とそびえ立ちます。その枝に鷲のような大きな鳥も、名もない小さな鳥も宿ります。栄光ある神の国を夢みている人にとってはレバノン杉こそ神の国にふさわしいものだったでしょう。しかし、貧しく、地にはいつくばって生きていくガリラヤの農民たちにとっては、たくましく生き、多くの種が支えあいながら、藪となっていくからし種のほうが、神の国にピッタリだったのかもしれませんが。